国立大学法人
浜松医科大学

アニュアルレポート2018

第14期事業年度（平成29年度）
2017年4月1日～2018年3月31日

建学の理念

第１に優れた臨床医と独創力に富む研究者を養成し、
第２に独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し、
第３に患者第一主義の診療を実践して地域医療の中核的役割を果たし、
以て人類の健康と福祉に貢献する。

目的及び使命

浜松医科大学は、医学・看護学の教育及び研究の機関として、最新の理論並びに応用を教授研究し、高度の知識・技術及び豊かな人間性と医の倫理を身に付けた優れた臨床医・看護専門職並びに医学研究者・看護学研究者を養成することを目的とし、医学及び看護学の進展に寄与し、地域医学・医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康増進並びに福祉に貢献することを使命とする。

浜松医科大学の基本データ

平成30年5月現在

学生数				
全体	1,208名			
医学部	[医学科] 730名	[看護学科] 259名		
大学院	[博士課程] 173名	[博士後期課程] 3名	[修士課程] 43名	

職員数	
全体	1,363名
役員	7名
教員	327名
事務等	1,029名

国家試験合格状況

学生一人ひとりへのきめ細かな指導により、高い合格率を実現

教育
医療人の養成

豊かな人間性を身につけた医療人の養成

医学及び看護学の進歩に対応する能動的学習能力、問題探究・問題解決能力、そして、幅広い教養に基づく豊かな人間性と確固たる倫理観、国際性を育み、地域社会に貢献できる医師・看護専門職を養成するとともに世界に発信できる研究者の育成を目指す。また、本学の特色でもある光技術等を用いた先進的な医学研究環境のもとで、次世代を担う人材育成として「光医学研究のリーダー」、「光医学の素養を持った医療人」を養成する。

医学科

自学自習の態度・研究心の育成、人間性・倫理性の養成、国際性の習得およびプロフェッショナリズム（コミュニケーション能力、倫理観等）を身につけた人材の育成を目指しています。

国際認証の取得に向けた新カリキュラム

PBL（少人数制の課題立脚型学習）の展開
教員の下に5年次生がチューターとして
3年次生、4年次生の学習をサポート＝**屋根瓦方式**
学生の主体的で意欲的な学習態度につながっています。

看護学科

生命の尊厳を尊重する倫理観と豊かな人間性、科学的知識に裏付けられた看護実践能力をもつ看護専門職の育成を目指しています。

基礎的な能力の上に応用能力を育成する **積み上げ方式カリキュラム**

学生への支援

グローバルな視点を身につけ、語学力、コミュニケーション能力を向上させます。

■ニカラグアでの医療ボランティア活動
大学が渡航費の一部を負担

■海外学術交流協定校での臨床実習、
IFMSA（国際医学生連盟）の臨床交換留学（医学科）

▲ イタリアでの実習

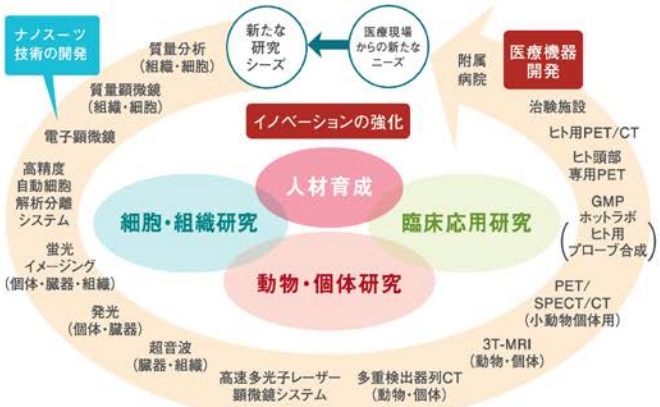
研究
光医学

光を用いた最先端医学研究の推進と人材育成

光技術と他の様々な先進的技術の融合による新しい医療技術の開発推進に取組む。特に新規光技術の医学への活用（メディカルフォトニクス）と光、電磁波等の多元的な原理を介した生体内の分子や情報の画像化に関して先端的で特色のある研究を推進する。

平成28年1月に発足した光尖端医学教育研究センターが中心となり、医学部各講座とともに一丸となって推進している。

■イメージングコンプレックス体制



New 光尖端医学教育研究センター

ナノスーツ開発研究部 始動

ナノスーツ開発研究部を、平成29年4月に新規設置しました。溶液から自立薄膜を形成させる「ナノスーツ®法」は、高真空下で生物体内からガスや液体が抜けることを防ぎ、生命維持できる技術です。このナノ薄膜を用いて高真空を必要とする電子顕微鏡で生きたまま・濡れたままの生態観察を可能としました。この研究部では、生物学・医学・材料科学など種々の学問分野を横断的に統合し、別々の方法と視点から、「ナノスーツ®法」の課題の解決を目指し、研究開発に努めます。

光医工学共同専攻設置
教育

大学院に博士後期課程（光医工学共同専攻）を設置し、光医学を基礎とした医工連携分野に精通した光医工学の高度専門人材の育成が、平成30年度よりスタートしました。

医工連携拠点棟
研究

平成30年度竣工予定

産学が協働し、産学連携活動や人材流動化を促進する環境の整備を行っています。

自閉スペクトラム症
研究 診療

オキシトシンを鼻から投与する臨床試験（治験）が全国7大学で平成30年2月末に始まり、コミュニケーション能力を改善する効果と安全性を確かめるため、治療薬の実用化に向けて取り組んでいます。

臨床研究審査委員会 厚生労働大臣の認定を取得
研究 診療

臨床研究法第23条に基づいて、これからも臨床研究の開発に努めます。

がんゲノム医療
診療

平成30年4月から、がん患者の遺伝子を調べて最適な薬や治療法を選ぶ「がんゲノム医療」連携病院として、医療を提供しています。

診療
地域医療

安全で良質な医療の提供

地域医療の中核病院として高度で安心・安全な医療を提供するとともに、病病・病診連携を促進し、地域社会のニーズと個々の病院機能に応じた医療ネットワークの構築を目指すことにより、地域医療の充実に貢献する。また、臨床教育の充実を図り、研究マインドを有する専門医の育成を推進する。

最新医療

ハイブリッド手術室
心臓血管外科手術等の高度な手術

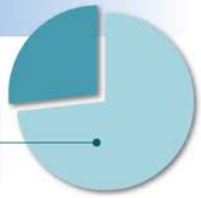
本院は特定機能病院として一般病院では不可能な高度な医療を行うことが求められています。**ロボット支援下手術システム**や**ハイブリッド手術室**などが導入され、ますます高度な医療の提供が可能となりました。より低侵襲な治療、最新の技術による治療成績の向上、先進医療、治療困難症例への積極的な取り組みなど、常に地域のトップリーダーとしての自覚を持ち、世界へ発信できる医療の発展に邁進しています。

特筆すべき診療内容

内分泌・代謝内科	原発性アルドステロン症	脳神経外科	神経膠腫（グリオーマ）
呼吸器内科	特発性肺線維症	整形外科	脊柱変形、難治性脊椎脊髄腫瘍
肝臓内科	ウイルス性肝炎	皮膚科	悪性黒色腫、皮膚リンパ腫
精神科神経科	認知症、摂食障害	泌尿器科	難治性腎細胞癌
小児科	先天奇形症候群	眼科	斜視
心臓血管外科	難治性胸部大動脈瘤	産科婦人科	子宮頸癌、ハイリスク妊娠
呼吸器外科	肺癌	放射線治療科	前立腺癌、頭頸部癌
上部消化管外科	消化器悪性腫瘍	形成外科	悪性腫瘍切除後の再建

臨床教育の充実・専門医の育成

平成30年度
県内の新専門医プログラム
応募者状況（総数：115人）



地域貢献
産学官連携

地域の方に愛される大学へ

産学官連携によるものづくりの実績を活かし、光技術等を活用した特色ある研究を基盤とした実用化開発を推進するとともに、それらの活動を行う人材を育成し、社会に還元してイノベーションの源泉となることを目指す。

公開講座
多彩なメディアを利用して授業

本学と静岡新聞社・静岡放送が主催、浜松ホトニクス協賛の公開講座が、平成30年春より新プロジェクトに生まれ変わりました。

「のばそう！しずおか健康寿命」
本学教授陣が、新聞、テレビ、ラジオ、ウェブ、公開スクーリングなど様々なメディアを通じて授業を行います。

産学連携・医工連携

本学は、ものづくり、光・電子技術、ソフトウェア技術にすぐれた浜松の地域企業と連携するしくみとして**「はままつ医工連携拠点※1」**を運営し、国産医療機器を生み出すための全国11拠点※2の一つにも選定されています。

※1 はままつ次世代光・健康医療産業創出拠点（科学技術振興機構[JST]地域産学官共同研究拠点整備事業）
※2 日本医療研究開発機構（AMED）国産医療機器創出促進基盤整備等事業

■医工連携による成功事例

- 頭部用PET診断装置
- 立体内視鏡システム
- 内視鏡先端キャップ
- 手術ナビゲーションユニット NH-Y100
- デジタル喉頭ストロボ LS-H10
- 診察指装着型オキシメータ
- 自動リンパ圧測定装置

頭部用PET診断装置

医工連携により企業の優れた技術と医療を融合させ、医療現場が必要としているものを**早く患者さんのために使えるよう**研究開発を行っています。

災害への取組み

DMAT派遣	静岡DMATのメンバーとして、他県の災害地域などにも隊員を派遣しています。
災害拠点病院	自治体等と連携した訓練への参加、構内インフラの整備等により、万一の災害に備えています。
DPAT派遣	災害派遣精神医療チーム。静岡県においても、円滑な応援体制と受援体制を整えるため、DPAT体制を構築し、平成29年3月に本学医学部附属病院もDPAT指定機関として指定されています。

テレビ会議で症例検討会を実施
診療

本学と浜松医療センターは、テレビ会議システムを用いた初めての合同消化器外科症例検討会を行いました。

病院間の診療連携を深める目的で、専用の高度なセキュリティ回線（閉鎖式通信網）を用いたテレビ会議システムを活用して、患者さんの病歴、レントゲン画像、検査データなどを双方向でテレビ画像を見ながら検討することにより、より専門性が高い診断や治療方針を決定することが可能となります。

平成30年3月

生活アシスト手袋及び指サック「ナノぴた™」
研究　地域貢献

本学と帝人フロンティア株式会社（本社：大阪市北区）は、指紋消失による指先の摩擦力消失などのがん薬物療法による副作用に対応した、生活アシスト手袋及び指サック「ナノぴた」を開発しました。

口腔開口器バイトガード
研究　地域貢献

本学とショーダテクトロン株式会社が共同開発した口腔開口器バイトガードは、第30回「中小企業優秀新技術・新製品賞奨励賞」を受賞するとともに、本学病院医療安全管理室の鈴木明特任准教授が、「産学官連携特別賞」を受賞しました。

貸借対照表 要約

決算日における資産、負債、純資産を表し、財政状態を明らかにしています。
借入金等の負債と国からの出資等の純資産による土地、建物等の資産をもとに教育、研究、診療の業務活動を行っています。

（単位：百万円）

資産の部	29年度	28年度	増減（29−28）
土地	6,493	6,493	―
建物	20,286	20,394	▲ 108
構築物	228	242	▲ 13
工具器具備品	5,193	3,225	1,967
図書	319	582	▲ 262
建設仮勘定	392	19	372
その他有形固定資産	7	8	▲ 0
無形固定資産	91	102	▲ 10
投資その他の資産	1,010	504	506
固定資産　計	34,024	31,572	2,452
現金及び預金	8,697	7,752	945
未収附属病院収入	3,756	3,635	120
たな卸資産	239	225	13
その他	154	268	▲ 113
流動資産　計	12,848	11,882	966
資産合計	46,873	43,454	3,418

負債の部	29年度	28年度	増減（29−28）
資産見返負債※1	3,155	2,952	203
借入金	16,056	17,030	▲ 973
リース債務	2,403	281	2,121
運営費交付金債務	102	181	▲ 79
寄附金債務	2,079	2,115	▲ 35
前受受託研究費等	306	285	21
未払金 ※2	4,636	4,040	596
預り金・その他	866	798	68
負債合計	29,606	27,686	1,920
純資産の部	**29年度**	**28年度**	**増減（29−28）**
資本金	5,317	5,317	―
資本剰余金	4,606	4,326	280
利益剰余金	7,342	6,125	1,217
（うち当期未処分利益）	1,217	813	403
純資産合計	17,266	15,768	1,497
負債・純資産合計	46,873	43,454	3,418

☆貸借対照表、損益計算書の端数処理については、百万円未満を切捨てています。合計及び増減についても円単位で計算したものを端数処理して、百万円未満を切捨てています。

【資産】

平成29年度末現在の資産合計は前年度比3，418百万円（7．9%）増の46，873百万円となっています。

主な要因としては、

工具器具備品が医療機器等の更新、整備に伴い1，967百万円（61．0%）増の5，193百万円となったこと、投資その他の資産が満期保有目的の有価証券の取得等に伴い506百万円（100．4%）増の1，010百万円となったこと、建設仮勘定が平成30年度完了予定の医工連携拠点棟新営その他工事、基幹・環境整備（給水設備更新等）等の実施に伴い372百万円（1,911．1%）増の392百万円となったことが挙げられます。

【負債】

平成29年度末現在の負債合計は前年度比1，920百万円（6．9%）増の29，606百万円となっています。

主な要因としては、

リース債務がリース資産の取得により2，121百万円（752．4%）増の2，403百万円となったこと、借入金が大学改革支援・学位授与機構への返済等により973百万円（5．7%）減の16，056百万円となったことが挙げられます。

【純資産】

平成29年度末現在の純資産合計は前年度比1，497百万円（9．5%）増の17，266百万円となっています。

主な要因としては、

資本剰余金が施設費による建物の取得等により280百万円（6．5%）増の4，606百万円となったこと、利益剰余金が当期未処分利益1，217百万円を計上したこと等により1，217百万円（19．9%）増の7，342百万円となったことが挙げられます。

（注）※1　資産見返負債　資産見返負債とは、運営費交付金、寄附金、補助金等を財源として取得した資産について、取得時に資産と同額の「資産見返負債（各々の財源の名称）」を負債に計上し、その資産の減価償却相当額と同額を取り崩し収益計上することで、収支均衡に作用する国立大学法人等の特有の勘定科目です。

※2　未払金　業者等への3月末時点での支払未完了の金額で5月末までには全額支払われるものです。

損益計算書 要約

年度内に実施した事業により発生した費用、収益を表し、一年間の運営状況を明らかにしています。
教育、研究、診療の業務・目的別に費用を示し、運営費交付金や附属病院等の財源別に収益を示しています。

（単位：百万円）

費用の部	29年度	28年度	増減（29-28）
教育経費	247	253	▲ 6
研究経費	1,345	1,206	139
診療経費	14,132	13,179	953
教育研究支援経費	371	129	241
受託研究費	790	764	25
共同研究費	55	37	17
受託事業費	291	272	19
人件費	11,684	11,580	104
一般管理費	435	463	▲ 28
財務費用	210	239	▲ 29
経常費用合計	29,563	28,125	1,437
臨時損失			
固定資産除却損	10	4	6
その他	14	14	▲ 0
費用合計	29,588	28,145	1,443
当期総利益	1,217	813	403

収益の部	29年度	28年度	増減（29-28）
運営費交付金収益	5,489	5,569	▲ 79
授業料等収益	724	720	3
附属病院収益	21,789	20,204	1,585
受託研究収益	780	757	23
共同研究収益	55	37	17
受託事業等収益	291	272	19
寄附金収益	550	541	8
間接経費収入	109	105	4
施設費収益	111	14	97
補助金収益	37	54	▲ 17
資産見返負債戻入	626	453	172
財務収益	0	1	▲ 0
その他の収入	232	208	24
経常収益合計	30,800	28,940	1,859
臨時利益	5	0	4
収益合計	30,805	28,941	1,864
目的積立金等取崩額	0	17	▲ 17

【 経常費用 】

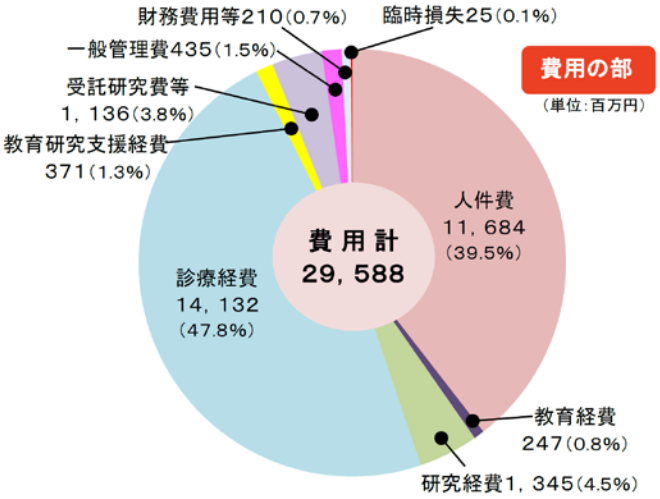
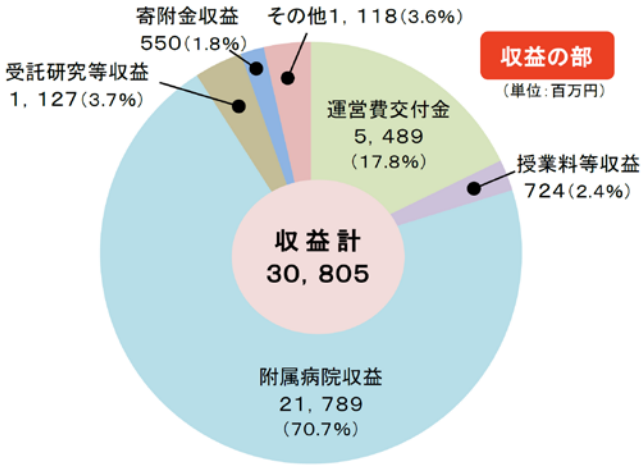
平成29年度の経常費用は前年度比1，437百万円(5．1%)増の29，563百万円となっています。

主な要因としては、

診療経費が患者数等の増加に伴う医薬品費及び診療材料の調達増により953百万円(7．2%)増の14，132百万円となったこと、教育研究支援経費が不用図書の除却増等により241百万円(187．1%)増の371百万円となったことが挙げられます。

【 経常収益 】

平成29年度の経常収益は前年度比1，859百万円(6．4%)増の30，800百万円となっています。

主な要因としては、

附属病院収益が手術件数の増、診療単価の向上等により1，585百万円(7．8%)増の21，789百万円となったことが挙げられます。